大学生のサッカー関係者におけるルールの認知度について

スポーツマネジメントゼミナール　1314028　佐田　有希

１．研究動機・研究目的

サッカーのルールはたびたび改変され、現在のフィールドの形や用具を使う体制になるまであまり時間はかからなかったが、細かいルールに関しては、数多くの問題点が見つかるため、1 年ごとにルールの変更が行われている。

目まぐるしく変化するルールの中、現役選手はどの程度サッカーのルールを理解しているのかということに疑問を抱いた。さらに、実際に現役の選手がどれほどルールを理解しているかということに興味を抱いた。また、観戦者としてサッカーを見ることが多くなった今、未経験者のルールの認知度はどの程度かについて、またスタッフとして関わっている者のルールの認知度に関しても興味を抱いたために本研究に着手することとした。

本研究の目的は、サッカー現役選手の学生、サッカー選手を引退した学生、実技授業に参加する程度の学生のサッカーに関するルールの認知度の違いを明らかにすることである。また、研究結果をもとにルールの認知度について指導者が理解し、小学生年代から正しい知識を身につけさせることを目的とする。

2. 研究方法

本研究の調査方法は、個人属性に関するアンケート調査とサッカー3 級昇格レベルに当たる問題を使用してテストを実施した。

1）調査対象者

本研究では J 大学生（サッカー現役選手＝蹴球部、現役引退選手＝フットサル部、サッカー授業参加者＝サッカーの授業に出席している学生）計 122 名に実施した。

2）調査方法：アンケート調査

（1）質問項目

①個人的属性：年齢・学年・競技歴・性別・現在の立ち位置・過去の競技レベル・学科・入試形態・現在のサッカー歴・出身地の 10 項目

②サッカー認知度についての問題 10 因子 48 項目：フィールド（13 項目）、フリーキック（2 項目）、警告・退場（2 項目）、基本知識（5 項目）、キックオフ（3 項目）、ドロップボール（3 項目）、アウトオブボール（2 項目）、オフサイド（3 項目）、ペナルティキック（5 項目）、再開方法（10 項目）の計 10 因子 48 項目。選択・正誤・記述の 3 方法を使用した。

4）分析：本研究の分析には SPSS version 23 を用いて記述統計および一元配置分散分析を行った。

3. 研究結果・考察

学年と正答率では大学 1 年・2 年・3 年・4 年生の学年の差が正答数にどのような影響を

及ぼすのか調査した。その結果、大学に入ったばかりの１年生はルールの認知度が低いことが示された。

サッカーチームにおける立ち位置と正答率ではレギュラー、非レギュラー、ベンチ外、スタッフの４つが正答数にどのような影響を及ぼすのか調査した。その結果、試合に出る機会が少ない選手において、ルールの認知度が低いことが示された。

過去の競技レベルと正答率では、小学校時代・中学校時代・高校時代の競技歴（地区大会・地方大会・全国大会・未経験の 4 項目）が正答数にどのような影響をもたらすのか調査した。その結果、小学生時代においては未経験者とサッカー経験者の間に有為な差があらわれた。また、原因は不明だが地方大会出場者の平均点が最も高かった。中学生においても同様に未経験者と経験者の間に有為な差があらわれた。ここでも原因は不明だが全国大会出場者が地方大会・地域大会出場者の平均点を下回った。高校生においても未経験者と経験者の間に有為な差があらわれた。ここでも地方大会出場者の平均点が最も高かった。

学科と正答率では J 大学における 3 学科（スポーツ科・スポーツマネジメント科・健康科）の所属学科の違いが正答数に影響をもたらすか調査した。学科には有意な差があらわれなかった。

入試体系と正答率では、J 大学へ入学する際に受けたテスト（一般入試・センター利用入試・一般入試＋センター利用入試・AO 入試・推薦入試）が正答率に及ぼす影響ににについて調査した。入試形態には有意な差があらわれなかった。

現在のサッカー歴と正答率では現在のサッカー歴（現役選手レベル・現役選手引退レベル・授業参加レベル）が正答率にどのように影響するのか調査した。その結果、今までサッカーに多く携わることが少なかったと思われる。授業参加レベルの平均点が非常に低かった。

性別と出身地に関しては比較できるほど被験者が多くなかった。

4. 結論

本研究では、サッカーに１度でも関わったことがある大学生を対象とし、サッカー現役選手の学生、サッカー選手を引退した学生、実技授業に参加する程度の学生のサッカーに関するルールの認知度の違いを明らかにすること、また研究結果をもとにルールの認知度について指導者が理解し、小学生年代から正しい知識を身につけさせることを目的とした。本研究から、サッカーのルールの認知度については、7 項目において有為差が認められるものの、122 名全員がサッカー審判 3 級昇格試験を合格するような点数に至らなかった。特に審判に抗議が多いフリーキックや警告・退場についての理解が十分でないことが示されたため、認知度を上げることが必要であることが分かった。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を進めるにあたり、指導教員の小笠原悦子教授、また共に切磋琢磨しながら研究に取り組んできたスポーツマネジメントゼミナールのゼミ員たち、アンケート調査に快く協力してくださった J 大学の学生及び指導者の皆様に、心から感謝の気持ちとお礼を申し上げます。